

社会福祉法人恩賜財団済生会 陸前高田診療所 被災地の復興を支える地域医療 “復興診療所” 社会福祉法人恩賜財団済生会陸前高田診療所を訪ねて

編集委員 藤平 裕也／成田 豊隆



済生会陸前高田診療所 外観



社会福祉法人恩賜財団済生会 陸前高田診療所(所長 伊東 紘一)は、東日本大震災で岩手県内最大の被害を受けた陸前高田市に県外から初めて設立された医療機関です。

2015年10月に住民の“一日でも早く”との声に応え、スーパーストア・「マイヤ」*1の倉庫を改装し竹駒町に仮設診療所を開設、診療を開始していましたが、本年2月15日、気仙町中井において待望の本設診療所が開設されました。

“住み慣れた町でもう一度安心して暮らしたい”という住民の想いと健康を、医療の立場から支え、地域の活性化・被災地復興・町づくりへ貢献する。“復興診療所”と呼ばれる本診療所が被災地 陸前高田市で提供する地域医療について伊東先生にお話をお聞きしました。

伊東 紘一 先生

東京都中野区生まれ。日本大学医学部医学科を卒業後、駿河台日本大学病院(現日本大学病院)循環器科、放射線医学総合研究所、山梨県岳麓赤十字病院(現山梨赤十字病院)、甲陽病院などを経て1975年より自治医科大学に赴任。臨床検査医学講座教授、同大附属病院副院長を勤め、2006年より常陸大宮済生会病院長、2013年より同名誉院長に就任。日本臨床検査医学会や日本超音波医学会、日本学会会議等で活動。

2015年10月より岩手県陸前高田市にて済生会 陸前高田仮設診療所を開設し診療開始。

2017年2月より済生会陸前高田診療所を気仙町中井に開設。

○はじめに診療所開設の経緯をお尋ねしました。

藤平：陸前高田市に診療所を開設しようと思われたきっかけは何でしょうか。

伊東先生：陸前高田市は東日本大震災の被害が岩手県内で最も大きかった場所です。

この地は妻の実家があり親族が暮らしていた故郷にあたります。気仙川河畔の今泉地区はかつて陸前高田市の中心地として栄え、釜石から気仙沼までの三陸沿岸地方の行政の中心でした。震災後にはそれらがすべて瓦礫の山と化しました。私たち夫婦は震災発生から1週間後に車で現地に入ることができ、行方不明の親族を捜し遺体安置所となったいくつもの体育館や公民館を必死で回って身元確認のため多数(約800)の遺体を見ましたが、家族にも見せたくはない無残な遺体も多かった。同時に避難所にいる人たちの診察にもあたり、当時住んでいた東京と陸前高田を何十回と往復しました。震災直後から、大勢の被災者やご家族の姿を目のあたりにし、この地が復興するためにはここで暮らす人々の医療と健康を支えなければならないと強く想い、この地に移住し診療所を開設することを決めました。そのときに、済生会本部が被災地

支援のために私たちの診療所を済生会として設立させてくれと希望したのです。済生会は「医療を受けることができないで困っている人達に施薬救療の途を講ずるように」という明治天皇の“済生勅語”に添えられた御下賜金により創立された恩賜財団です。陸前高田は非課税世帯が3割もあり、このような人達を助けることはわれわれの理念でもあり済生会理事とも話し合いを重ね、実家の土地3,000坪を妻が提供し、診療所開設に至りました。

○診療所の特徴についてお伺いしました。

藤平：本診療所の建設にあたりどのような点を重要視されたのでしょうか。

伊東先生：高齢化が進み診療所や病院に行くのも大変な状況に陥っています。在宅医療や訪問介護、介護サービスへの取り組みを充実をしていかなければなりません。また復興支援という観点から、雇用創出・高齢者の社会参画も視野に入れ、本施設には診療所機能のほかに訪問介護ステーション、居宅介護支援事業所棟等を整備し、またコミュニティー形成を支援する地域交流スペースも設置しました。これらを地域

の人々に供用・展開することで被災地復興の模範となるような地域包括ケアシステムを構築していきたいと考えています。

藤平：診療所の診察内容はいかがですか。

伊東先生：内科と整形外科を標榜していますが、診察内容は多岐にわたり、総合診療科です。心筋梗塞・弁膜症のような循環器疾患、大腸がんや甲状腺腫など多彩な患者さんの容体を診察し全身を診ています。また週に一度、整形外科診療も行っており、来院される患者はとて多いです。来院患者だけではなく、通院のできない高齢患者も多く、患者宅への往診や、在宅診療には患者一人ひとりについて月に二度の定期診療も行っています。



済生会陸前高田診療所(現在診療所と職員住宅が完成)



伊東先生



往診の様子

藤平：診療所の設備導入で重要視したポイントは何でしょうか。
 伊東先生：医療施設が絶対的に少ないこの地域で一番重要なのは迅速な検査・診断だと考えています。検査結果を待っている間に重篤化するケースもあり、急性期患者やCT/MRI検査が必要な場合は県内外の県立病院を紹介し訪問してもらわざるを得ないのが現状です。

限られた設備投資の中で迅速な検査・診断を下すことができる、エコー、血液/生化学検査装置はとても重要な設備と考えています。実際に仮設診療所の開設初日に来院した患者の中に体のだるさを訴えた男性がいました。触診で脾臓の腫れがあり、エコーで脾腫を確認し血液疾患を疑いました。その場(所内)で血液検査を実施し、白血病と即時診断してすぐに県立大船渡病院へ紹介することができました。患者はその後、順調に回復し退院に至っています。この男性患者は以前から調子が悪く、周囲に病院に行くよう勧められていたが病院嫌いで行かなかったそうです。でも近くに診療所ができたから来たと言っていたそうです。この患者を診られただけでも前倒しで診療を開始した甲斐があったと思いました。

○診療でのエコーの有用性についてお伺いしました。

藤平：実際の診察でエコーをどのように活用されていますか。

伊東先生：外来での診療では腹部、心臓、表在、整形外科などすべての領域に対して超音波はフル活用しています。患者の容体を診てすぐに検査が可能で、迅速な診断を下すことができます。日本超音波医学会の総合超音波専門医としての実践を行っています。

もちろん、往診の際にも、持ち運びも容易な高画質エコーである「ARIETTA^{®2} Prologue」(株式会社日立製作所製)が活躍しています。往診先は狭い場所が多く、小型でなくてはならない。また、小型ゆえに画質が劣化すると正確な診断に支障を来すことがある。この「ARIETTA Prologue」は高画質と小型を両立し、外来から往診の移動と幅広い診察内容をカバーする優れたエコーだと思います。

○今後の展望について。

藤平：今後の診療所・地域医療の展望についてどのようにお考えでしょうか。

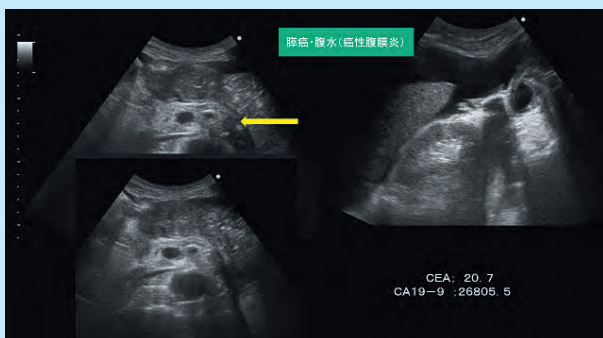
伊東先生：旧来、名医とは長い年月で培った経験が豊富なベテラン医師であり、研修医はかなわないと言われていたが、今やエコーや血液/生化学検査機器など、世の中にある「武器」を駆使することで迅速で正確な診断が可能になり、研修医が名医に対抗することができると思います。



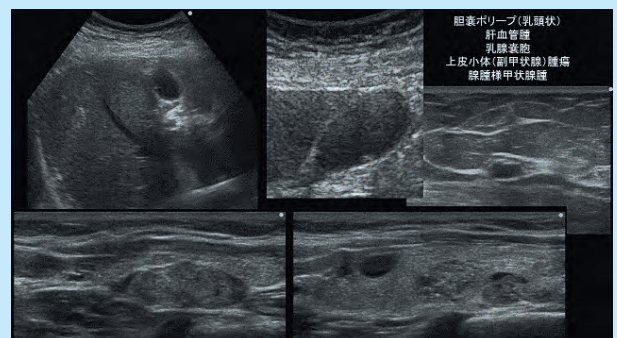
POC(Point of Care)-testing 診療所で直ちに検体検査(血液・生化学等)を行い診断ができる



エコーは診療所でも在宅でも効果を発揮できる*3



腹部膨隆により来院し、直ちにエコーを行い膵管癌と癌性腹膜炎の診断ができ、腹水を採取し腫瘍マーカーを検査した



エコーを用いることにより、胆嚢ポリープ、肝血管腫、乳腺嚢胞、腺腫様甲状腺腫、上皮小体腫瘍が初診時に一度に診断されている

本診療所の第2期事業として、介護老人福祉施設の設置を検討していますが、現実には在宅医療／往診を担う医師がまだまだ不足しています。地域医療を担う医師が多く育ち、一緒に生活支援を含有した地域包括ケアシステムを醸成していけたら良いと考えています。

また、被災された人々の精神的な傷は癒えてはいません。震災が起こった時期に起こるフラッシュバックに悩まされる患者も少なくなく、心療内科の必要性があると切に感じています。復興診療所の役割の一つとして同時に検討していきたい。

〇おわりに

未曾有の死者・行方不明者を出した東日本大震災から早や6年が経過したが、復興は遅々として進まないのが現状である。報道機関や行政はわずかにできた復興部分に光をあて、大部分の復興の進まない荒野のような場所の報道は避けているのである。まだまだ多くの人たちが仮設住宅に住んでいる。高齢の被災者たちは、仮設の片隅でひっそりとしている。復興住宅に移り住んだ老人たちは一人で高層の建物の中で閉じこもりになっている。関東の済生会から診療支援に来ている整形外科医が述べる感想は、実際に見ると報道の内容とはあまりにも違うということである。

※1 マイヤは株式会社マイヤの登録商標です。

※2 ARIETTAおよび※3 ALOKAは株式会社日立製作所の登録商標です。



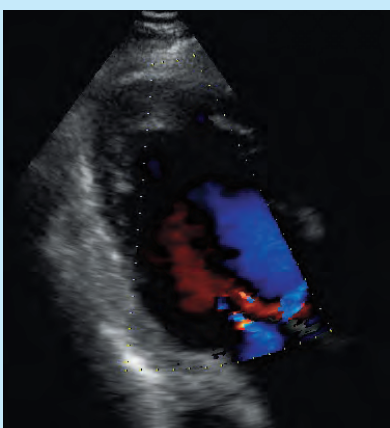
一本松



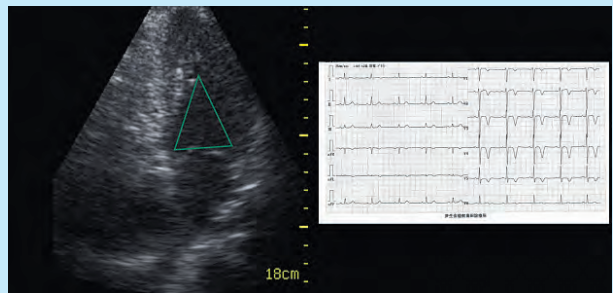
右から
東北支店
葛西副支店長、
盛岡第一営業所
赤崎所員



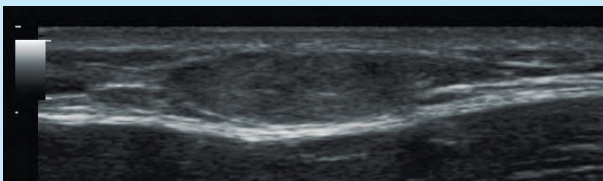
指にトゲが刺さり10日後に腫れてきたので来院。直ちにエコーでトゲが見つかり摘出した。トゲはプラスチックであり、X線では描出されない



収縮期・拡張期雑音が聴取され、大動脈弁逆流と僧帽弁逆流が認められた



心尖部肥大型心筋症



前腕の神経鞘腫がエコーで確定できる